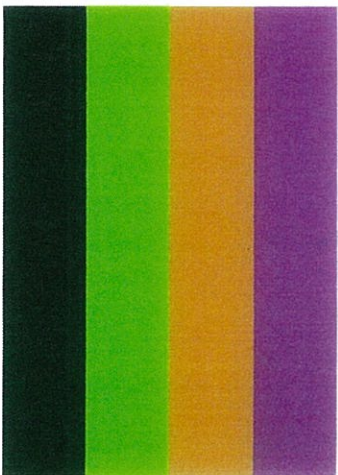
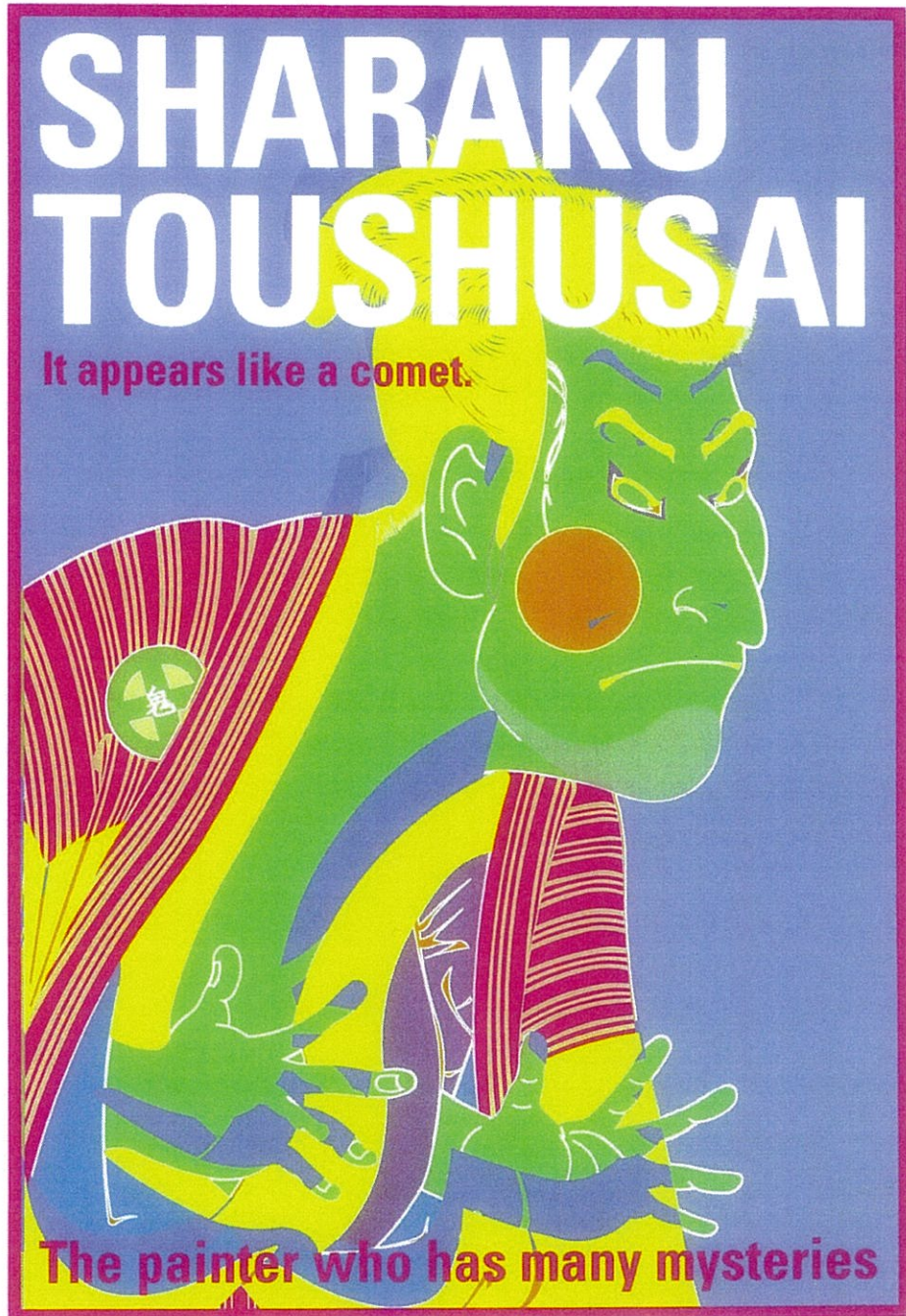


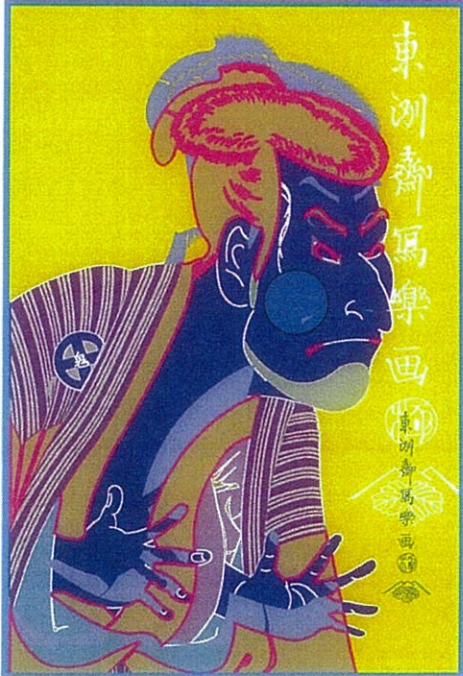
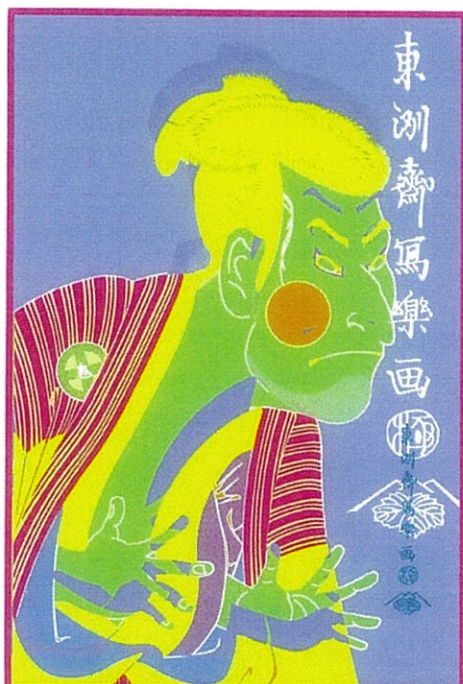
写 SHARAKU 楽  
TOUSHUSAI

The painter who has many mysteries



presented by EFFORT





# 写楽 SHARAKU 楽 TOUSHUSAI

## 謎多き、天才絵師 東洲齋写楽

東洲齋写楽と名乗る浮世絵師が、寛政6(1794)年5月に彗星のごとく現れ、翌7年2月までの僅か10カ月間(寛政6年には閏月があった)にとびきり個性的な約140点の役者絵と数点の相撲絵を残し、それぎり忽然と姿を消してしまった。

確認されている中で、写楽の筆によるものと思われる作品の大首絵は、大胆かつ巧みにデフォルメを駆使しながらも、目の皺や顰鼻、受け口など、その役者が持つ個性をありのままに、戯画的な誇張の奥の深刻な心理描写を描き、ユニークな役者絵となっている。

短期間に集中的に制作し、その後は浮世絵界との関係を絶って、消息はほとんど伝わっていないこの写楽とは、いったい誰なのか。我が国で最も人気のあるこの正体探しが賑やかに繰り広げられてきた。

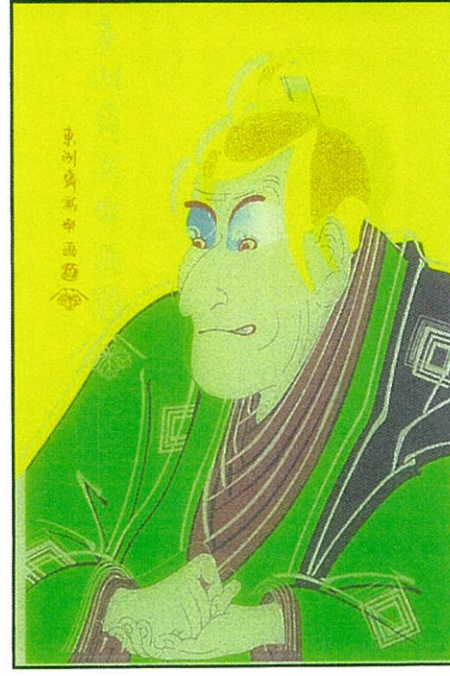
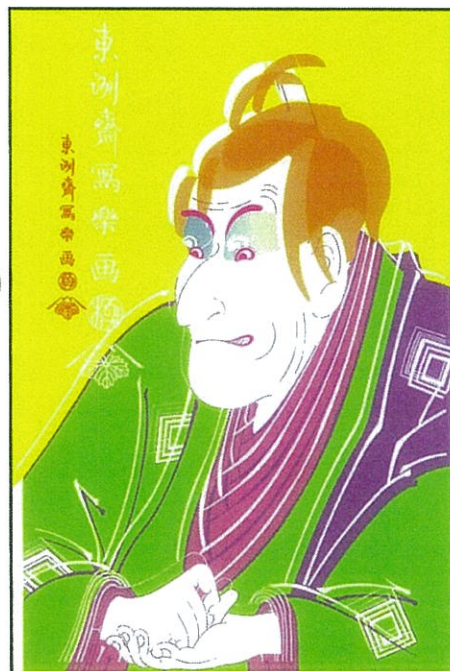
現在、この正体問題に最も有力なものは、写楽は阿波藩(現在の徳島県)お抱えの能役者・斎藤十郎兵衛であるという説である。

では彼はなぜ、阿波藩お抱えの能役者でありながら、10カ月も江戸の芝居小屋に入り浸って、絵を大量に描くことができたのか?

それは、江戸藩邸勤めのため八丁堀地蔵橋に住んでおり、大名お抱えの能役者の勤めは当番と非番が半年か1年交替のため、その非番期間を利用して絵を描くことが可能だったと考えられる(この時、写楽33歳)。そして、写楽が斎藤十郎兵衛であることが秘密にされたのは、大名お抱えの能役者という下級武士であろうと武士に変わりはないため、当時、その実名と身分を明らかにすることは憚られたからであろう。

正体と並ぶもう一つの謎は、なぜ写楽は忽然と消えてしまったのかということである。写楽の才能を発掘し、写楽の大胆な絵に社運を懸けた版元(出版業)・蔦屋重三郎と写楽のコンビが短期間に大量制作を行い、それが祟って写楽の絵の質が落ち、敗北を喫したためと考えられている。

謎も含め、彼の人気を高めてきたのは、役者に生き写しの、役者の欠点を強調するような毒を秘めた強烈な絵、他のどの浮世絵師にもない大胆で迫力のある構図など、前例のない個性的な絵を描いたからであろう。



The painter who has many mysteries  
**SHARAKU**  
**TOUSHUSAI**